

# 近世中期出雲方言の大きき語彙

田 籠 博

キーワード：「ほそし」、「ふとし」、大きき語彙、出雲方言、産物帳

## 要 旨

現代出雲方言では、物の大きさを表す「大きき語彙」の体系が共通語や西日本方言の大部分と異なり、特にホソイ類が〈小さい〉の意味を表すという特色がある。近世中期に作成された出雲国郡別絵図註書帳の大きき語彙を調査すると、相対的な〈大〉は「ふとし・おおきなり」で、同じく〈小〉は「ちいさし・ほそし・こまかなり」で表されている。「ほそし」が〈小〉の意を表すことは、大小二種の茸を「大キ成分」と「細き分」とで対比的に示す例に端的に示される。「こまかなり」はその使用例から、〈小〉の下の意味領域を担う語と考えられる。『日本言語地図』の出雲方言と比べると、〈大〉フトイ類の消滅とオオキナ類の進出があったこと、〈小〉ホソイ類の使用の連続的であることが判明する。言語地図を適切に解釈するために、この時期の各地域の文献の調査が必要で、中央語文献における「ほそし」の語史を明らかにする必要もある。

## 0 はじめに

事物の大きさは大小・長短・軽重など種々の水準で対比的に表現されるが、本稿では相対的な〈大〉〈小〉を表す語（共通語のオオキイ・フトイ・アライ等とチイサイ・ホソイ・コマカイ等を併せたもの）を「大きき語彙」と仮称する。現代語の大きき語彙の体系的な意味分析は管見に入らないため、本稿でも厳密な意味区別をとっていない。

以下では、近世中期の元文年間に、島根県東部の出雲地方で作成された産物帳関係資料における大きき語彙の使用状況についてやや詳しく紹介し、その結果を現代出雲方言と比較して、近世中期から現代までに生じたと考えられる変化について考察する。なお、資料の特殊性を考慮して用例を多めに掲げた。

## 1 資料「出雲国郡別絵図註書帳」について

近世中期の享保・元文年間（ほぼ1735～1737の間）に、幕府の医官丹羽正伯（貞機、1691～1756）による「諸国産物帳」事業があったことは早くから知られていたが、盛永俊太郎・安田健編『享保元文諸国産物帳集成』（以下『集成』）により初めて全容が明らかに

注<sup>1</sup>  
 になった。

産物帳は内容上、二種に分かれる。一種は動植物名を一覧した「本帳」である。正伯の指示で「俗名(方言名)」記載が原則だから、当代の動植物方言資料として貴重な存在である。もう一種は「<sup>注2</sup>絵図註書帳」である。方言名のため該当種の判別が困難なものについて、<sup>注3</sup>絵図(写生図)・註書(説明書)が求められ、それに<sup>注4</sup>応じて作成された。

本稿で資料として用いる「<sup>注3</sup>出雲国郡別絵図註書帳」6冊は、島根県古代文化センターの所蔵に係り、2000年5月に公開された『<sup>注3</sup>集成』未収の新出資料である。松江藩支配の出雲国10郡中6郡(能義・意宇・楯縫・出雲・神門・飯石)の各郡役所が作成した<sup>注4</sup>絵図註書案と、藩の担当者による註書改訂案を備える。大部分は元文元年(1736)に成り、翌年一部の補足が行われた。内容は1紙の右に絵図、左に註書を認める通常の形式で、冊子本では表に絵図、裏に註書となる。各註書には改訂案の紙片が重ねて貼付されている。<sup>注4</sup>「本帳」の<sup>注5</sup>編纂資料は各地に残っているが、<sup>注5</sup>絵図と註書が備わる基礎資料は管見の範囲では珍しい。

## 2 問題の所在

産物帳を言語資料として扱うとき、筆者がこれまで対象としてきたのは本帳であった。動植物の方言名が豊富だから当然のことである。絵図註書帳は種の同定には不可欠であるが、註書は概ね文語体で、方言を含むとしても量的に問題にならない。<sup>注6</sup>

所が、出雲国郡別絵図註書帳を調べるうちに、次のような興味ある事例に気づいた。鳥類の例を掲げる。(注記の(原)は原案、(改)は改訂案、見出しの右は郡名と註書番号)

### 例1 いでおとし(意宇41)

(原)鳥の太サ、はとより少シふとく、惣身鼠色、足黒ク、はし黒ク、四季共二田の中二住。鳴音きやうゝと申候。五位鷺とも申候。

(改)鳥の大サ、鳩より少ふとく、惣身鼠色、足黒く、はし黒く、四季共二田の中に住申候。

### 例2 むさゝび(出雲16)

(原)雀よりちいさく、冬雪積り候(節)、檐下井溝などへまいり申候。みそさゞいとも申候。

(改)惣身の色薄黒く、雀より少ちいさき鳥にて御座候。

### 例3 ぬか鳥(意宇43)

(原)冬より春の頃まで、森木の内に住。鳥の大サすゝめよりも細く、形チ図のごとく。

(改)冬より春の頃迄、森木の内二住。雀よりも細く御座候。

興味ある事例の一は、**例1**のように、鳥の〈大〉を「太サ・ふとし」で表すことである。絵図によっても「五位鷺」が「鳩」より〈太い〉とは見えないから、オオキサ・

オオキイというべき所である。

その二は、鳥の〈小〉を [例2] 「ちいさし」とも [例3] 「細し」とも表すことである。この2例から「ちいさし=ほそし」となれば、意味区別の点で問題がある。

次例は〈大〉〈小〉を対比的に記した註書である。

[例4] 萩茸 (菌類 飯石 27)

(改)九月の頃深山ニ生し、大キ成分ハ、笠の廻り六七寸、茎の大き杖竹位、長さ三四寸、細き分ハ、笠の廻り壱寸式三步、茎の大き箸位、長さ壱寸計。茸の色鼠色ニて御座候。

この例では、同名の茸の〈大〉〈小〉が各々「大キ成分」「細き分」で表されていることから、「ほそし」が「おおきなり」の対義語、すなわち現代語チイサイに相当することがほぼ確かなように見える。

当時の標準的な文章語として異様な上の諸例は、これを近世中期出雲方言の反映と解することで説明できるのではないかと筆者は考える。以下、その可能性を念頭におきながら、郡別絵図註書帳 (以下、本資料とよぶ) の大きさ語彙について検討する。

### 3 〈大〉を表す語

本資料には〈大〉を表す語例は意外に少ない。具体的な数値 (寸法) によって表すのが原則で、相対的な〈大〉の表現は斥けられたようである。その中で、「おおきなり・ふとし」2語に例があり、関連して漢字表記「大さ、大く」の訓みが問題となる。

#### 3-1 「おおきなり」

形容詞「おおきい」は確例がない。「おおきなり」も前掲 [例4] の原案・改訂案に各1例あるほかは次例だけで、計3例にすぎない。

[例5] 大なきり (魚類 神門 56)

(原)川に居申候。長さ四五寸位より大キ成ハ無御座候。

現代語オオキイに観察されるように、[例5]の「おおきなり」は〈長さ〉を下位に含む大きさ語彙の上位に位置する語で、[例4]で「笠の廻り・茎の大き・長さ」を「大キ成分」と総括していたのと同様である。なお、3例すべてが「大キ成」と表記するのは、「ダイなり」という音読形を避ける工夫であろう。

#### 3-2 「ふとし」

「ふとし」はやや多く、仮名書きで9例存する。

[例6] 大根堀うへ (菜類 能義 36)

(原)六月種を蒔、冬ニ至順々ふとく相成、長サ七八寸くらいより壹尺くらいまで、太サ三四寸廻り。

例7 嶋のせんとう (鳥類 楯縫 60)

(改)羽色は青黒く、足は黄色、太サ雀より少ふとく御座候。

例8 ひこちや (魚類 楯縫 46)

(原)五月之頃より八九月迄、磯辺に居申候。長サ四五寸位よりふとくは相成不申候。

例6 は問題なさそうだが、この「ふとし」は「長サ・大サ」の上位語の可能性もある。例7 は前掲例1 と同じ問題を含む。例8 は現代語としては誤用とすべき例である。現代語フトイは〈長さ〉の上位概念を表す語ではではない。この種の用法を典型的に示すのは次例である。

例9 なきり (魚類 能義 24)

(原)長サ五六寸、幅壹寸四五歩くらい、厚サ三四歩くらい御座候。是等くらいよりふときハ見覚不申候。

この「ふとし」が「長サ・幅・厚サ」を総括的に含むことは明らかで、本資料の「ふとし」は現代語フトイより意味領域が広く、むしろオオキイに相当する語だと考えられる。だとすれば、例6 も〈大きく〉の意に解すべきかもしれない。

### 3-3 「ふとさ」

「ふとし」は9例にすぎないが、その名詞形「ふとさ」は78例、漢字表記「太さ」8例を加えると、計86例がある。次に、A～Cの3類に分けて掲げる。

A類 例10 赤ねじ (木類 意字 6)

(改)木栗色ニて、木のふとさ七八寸廻、長サ壹丈位御座候。

例11 亀から (木類 神門 2)

(改)木の太さ式三寸位、長さ三四尺御座候。

B類 例12 秋梅 (菓類 能義 38)

(原)梅のふとさ常躰の梅より少細ク、風味平生之通に御座候。

例13 きつ草 (草類 意字 22)

(改)三月之頃白き花咲、りんの内に赤筋有り。花のふとさ三步計、実は付不申候。

C類 例14 谷皿の木 (木類 能義 6)

(原)葉青く、五六月の頃、葉の長サ二三寸くらいに成申候。

(改)春芽出し、葉の色青く、五六月の頃、葉のふとさ式三寸位ニ成。

例15 つないし (魚類 意字 36)

(原)年中海中に住、魚の大サ三四寸計。脊青白く、腹白し。

(改)年中水うみに住。大サ三四寸計、脊青白く、腹白し。

A類には一応問題がない。B類はやや難しく、**例12**は「ふとさ〜細く」と表現は整っているものの、今日では梅実についてフトサやホソイを用いない。花の大きさを表す

**例13**も異様である。C類が誤用に近いことは言うまでもない。

A〜C類の「ふとさ」を一括して説明するためには、「ふとし」の場合と同様、これを現代語オオキサに相当するものと認めるほかはない。

### 3-4 「大き」「大きく」

本資料の「ふとさ」が現代語オオキサに相当するとすれば、120余例もある「大き・大サ」、6例の「大きく」をどう訓むべきかが問題になる。註書案の改訂結果を通して検討しよう。

**例16** 嶋のせんとう (鳥類 楯縫60)

(原)大サすゝめより少シ大く、鳴音ハきいゝゝと鳴申候。

(改)大サ雀より少ふとく御座候。

**例17** いでおとし (鳥類 意字41)

(原)鳥の大サはとより少シふとく、惣身鼠色、足黒く、はし黒く、四季共二田の中ニ住。鳴音きやうゝゝと申候。五位鷺とも申候。

(改)鳥の大サ鳩より少ふとく、惣身鼠色、足黒く、はし黒く、四季共二田の中に住申候。

**例16**では「大く」から「ふとく」へ、**例17**では「大サ」から「大サ」へ改訂されている(前掲**例15**も同じ)。これらの改訂は、記事内容の変更が意図された結果とは思われないから、単なる表記の変更と解するのが適切で、「大き・大く」は「ふとさ・ふとく」と訓むべきものという結論になる。

次の諸例は、**例16**と同じく原案の「大サ・大き」が改訂案で「ふとさ」となっているものである。全部で11例のうち5例の原案のみを示す。

**例18** のぶの木 (木類 能義4)

(原)木の高サ壺丈二三尺くらい、大サ壺尺式三寸廻り以下。

**例19** こぶの木 (木類 楯縫2)

(原)木の大サ式三寸廻り、高サ四五尺位、くきに針御座候。

**例20** さるのめの木 (木類 楯縫5)

(原)木長サハ六七尺位、大サ七八寸廻り迄ノ木ニ御座候。冬は落葉仕候。

**例 21** なべわり木 (木類 楯縫 16)

(原)木長サ二三尺位, 大サ四五歩廻り位迄ノ木ニ御座候。落葉仕候。

**例 22** 仏の馬 (虫類 神門 80)

(原)大サ壱寸五歩, 貳寸位ニテ御座候。

これとは逆に, **例 17** と同様, 原案の「太サ」が改定案で「大サ」となった例もある。

**例 23** いさゞ (魚類 意字 33)

(原)冬春の頃まで, 水海ニ居申候。水色より少赤ク, 太サ貳寸斗。はらニ黒きほし有。

**例 24** つないし (魚類 意字 36)

(原)年中海中ニ住。魚の太サ三四寸計。脊青白く, 腹白し。このしろに似申候。

**例 25** 砂むし (虫類 意字 52)

(原)年中海端ニ居申候。虫のいろくり色, 腹白シ。太サ壱歩斗。砂浜の上とびあるき申候。

「大さ→ふとさ」「大く→ふとく」に加えて「太さ→大さ」の改訂例があるから, 各表記は自由に交替しうるもので, 結局「大さ, 大く」は「ふとさ, ふとく」の異表記にすぎないと推測される。<sup>注7</sup>

### 3-5 <大> を表す語のまとめ

本資料の大きさ語彙のうち, <大> を表すのは基本的に「ふとし」であったと考えられる。それは <大きい・太い・長い> 等を具体的に表すだけでなく, <大> の上位概念を総括的・抽象的に表す語としても用いられ, ほぼ現代語オオキイに相当する。

ただ, 「ふとし」と「おおきなり」の関係はどうかという問題が残っている。「おおきなり」は, **例 4** や **例 5** のように, 物の大きさを概括的に示す用法に限られ, 「ふとし」の自由な用法とは相違する。しかし, 例えば「ふとし」を口語的, 「おおきなり」を文語的といった認定も用例からは無理である。2語の間の意味区別に関して, 本資料から結論を得ることはできない。

## 4 <小> を表す語

前掲 **例 4** に見るように, 本資料で「おおきなり」の対義語となるのは「ほそし」である。その他, 「ちいさし・こまかなり」が<小>を表し, いずれも相当数の用例がある。

### 4-1 「ちいさし」

仮名書きの「ちいさし」は14例で, うち12例が原案に見える。誤記の可能性を考慮すべきだが, 「ちさし」も1例ある。

## 例 26 おたい草 (草類 意字 28)

(原)春より生し、夏ちいさきあゐ色のはなさき、りんの中ニけしの実のやうなる実成。

(改)春めを出し、夏ちいさき梅之花に似たる花咲、りんの中ニけしの実のやうなる実成。

## 例 27 むさゝび (鳥類 出雲 16) 重出

(原)雀よりちいさく、冬雪積り候(節)、檐下井溝などへまいり申候、みそさゞいとも申候。

(改)惣身の色薄黒く、雀より少ちいさき鳥にて御座候。

## 例 28 すゝみむし (虫類 神門 70)

(原)夏の間、木末にて鳴、形ちさきものニ御座候。

(改)〔虫損〕少青く、木〔虫損〕居申候。ふとき一寸二三歩位。

漢字表記「小き・小く」は8例で、原案と改訂案に各4例である。これらも、次の改訂例から「ちいさき・ちいさく」と訓むことができよう。

## 例 29 おもひくさ (草類 出雲 5)

(原)夏田に多く生し、秋に〔虫損〕ちいさく白き花付申候。

(改)夏田に生し、(中略)秋に至り、色白く小き花付申候。

## 例 27 を 例 17 「鳥の太サはとより少しふとく」と比べれば、「ふとし/ちいさし」

という対義関係を導くことができる。「ちいさし」が表す〈小〉の程度は、

## 例 30 なとめ草 (草類 神門 32)

(原)実ハ葉の股間より、細か成黄色花咲、小キ実成申候。菜種粒に似申候。

(改)九月の頃、黒き芥子ほとの実成申候。

によれば、「菜種粒、芥子ほと」に譬えられているから、相当程度の高い〈小〉のこともある。

所が、次のような改訂例のあるのを見ると、「ちいさし」と「ほそし」との関係が問題となる。括弧内に改定案を示す。

## 例 31 はなたちはな (草類 出雲 2)

(原)藪に生し、夏ちいさく白き花咲(夏細白き花咲)、秋実なり申候。

## 例 32 はいこり (草類 出雲 8)

(原)山に生し、四季ともに不萎。秋ちいさくしろき花つき申候。(秋白くほそき花咲申候)

## 例 31 改訂案の「細」は訓みが不明だが、例 32 では「ちいさし」が「ほそし」へ

変わっている。原案と改訂案とが同意だと仮定して、「ちいさし=ほそし」という等式を認めることができるかという問題である。

## 4-2 「ほそし」

本資料の大きさ語彙の中で、最も特徴を有するのは「ほそし」である。「ほそし」7例、「細し」19例のうち、前掲 **例 32** と同様に「ちいさし」と同意だと解しうる例を次に列挙する。

**例 33** じやう柚 (菓類 能義 2)

(原)実翌三月花をもよほし候ころまで御座候。柚のほそき様成にて御座候。(大サ柚の細か成ことく)

**例 34** こといこやし (草類 意字 29)

(改)四月末にほそき黄色成花咲, 五月けしのやう成青白き実成申候。

**例 35** 磯辺せり (草類 出雲 9)

(原)秋ちいさく黄なる花さき申候。実はからしに似て成ほとほそく御座候。(実の形からしのことく細かにて)

**例 36** さゝびやつこり (草類 出雲 12)

(改)葉茎ともに色青く, 秋色白くほそき花咲申候。実は成不申候。

**例 37** 秋梅 (菓類 能義 38)

(改)梅のふとさ, 常の梅より少細く御座候。

**例 38** かわこ花 (草類 意字 26)

(改)夏赤き花咲, 六七月の頃小麦粒より細き実成, 八月の頃迄御座候。

**例 39** むか鳥 (鳥類 意字 43)

(原)鳥の大サすゝめよりも細く (雀よりも細く御座候)

**例 40** すゞかね (獣類 意字 45)

(原)年中野に居申候。かたち細き (細く) 鼠ニ似申候。

**例 41** あさかべ (木類 出雲 3)

(改)実の色も青く, 形はそく白の実より細く御座候。

**例 42** 大黃しんざい (草類 出雲 7)

(改)九月頃実成, 実は細く, 熟し候えは色黒く成申候。

表記上、「細き・細く」を「こまき・こまく」とよむ可能性を排除できないが、「こまし」の存在を積極的に裏づける仮名書き例等が得られないから、すべて「ほそし」と考えておく。そこで、**例 39** を **例 17** 「鳥の太サはとより少しふとく」と比べると、ここでも「ふとし/ほそし」の対義関係が得られ、「ちいさし」と併せると「ふとし/ちいさし=ほそし」となる。これが成り立つとすれば、次の諸例も〈小さい〉の意に解すべきかもしれない。

例 45 やもめ虫 (虫類 能義 35)

(原)長サ壹寸斗の細き虫にて (長さ壹寸計にて), 尻頭もなく, 両方に黒キはり有之。

例 46 もじなし (木類 意字 9)

(原)葉青ク, 柿の葉より細ク (柿の葉に似て少細く), 木立図のごとく。

例 47 塩かい虫 (虫類 楯縫 69)

(原)溝川に居申候。形絵図之ことく, 細ク御座候。(壹歩位, 長サ六七歩)

例 48 かるり (瓜類 出雲 10)

(改)葉のかつかう瓜の葉より少細く, 夏花咲。

以上から, 本資料の「ほそし」が現代語チイサイに相当するとすれば, 前掲例 4 の「大き成分……細き分」という対比的表現も, <大> <小> を比べるとききの当然の表現であったといえよう。

所が, ここでは新たに「ほそし」と「こまかなり」との関係が問題になる。例 33・

例 35 のように, 原案の「ほそし」が改定案で「こまかなり」に改められているからである。「ちいさし=ほそし」だけでなく, 「ほそし=こまかなり」という等式も成立する可能性がある。

#### 4-3 「こまかなり」

本資料に「こまかい, こまい」はなく, 「こまかなり」が 49 例見える。「こまかに, こまか成」のほか, 「細かなり・細か成・細か成ル」等で表記され, すべて「か」の仮名が備わる。

例 49 やへしば (草類 能義 7)

(原)秋実成, 冬黄色にかれ申候。実薄黒にして, こまかに御座候。

例 50 ひばりはし (草類 能義 14)

(原)春生立, 黄赤色の花付, 黒色のこまか成実成 (細か成実成)。

例 51 すき草 (草類 意字 14)

(原)春より野に生し, 秋細かなる実成 (細かなる白き実成), 花は見へ不申候。

例 52 しらさでむし (虫類 意字 50)

(原)春より夏の頃迄, 野に居申候。成程細か成, ぬかのやうなる赤きむし, かたち不祥<sup>(マ)</sup>。

例 53 かて (草類 神門 30)

(改)春田に生し, 冬枯申候。葉の色青く細かにて, 白き花咲, 実は成不申候。

例 54 あたまふり草 (草類 神門 33)

(原)春田に生し, 夏花咲, 八月の頃実成, 冬に至かれ申候。図のごとく, 細か成粟粒

に似申候。

例 55 しぶき (木類 飯石 2)

(原)茶の木に似て、(中略)葉色青く、茶の葉より細かなり。尤細か成る白き花付。

(改)冬木、葉の色青く、幅三四歩位、長さ壹寸貳三步計、白き細か成花つき、

例 56 さかいり (木類 飯石 14)

(改)花空色、実細か成粟つふのやう成ものつき申候。

花・実の例が多く、木葉や枝、小虫、魚鱗に関するものが少数ある。例 52・例 54・

例 56 で「ぬか、粟粒」に譬えられるように、現代語の「細かい」に通じる点もある。

例 55 原案の「茶の葉より細かなり」は少し問題で、改定案の寸法「幅三四歩位、長さ壹寸貳三步計」は「ぬか、粟粒」の水準とは明らかに異なる。これは、例 46 「柿の葉より細く」、例 48 「瓜の葉より少細く」と同様に相対的な〈小〉を表し、その点で「ほそし」と意味に近いが、比較の対象が木葉としては小葉の「茶の葉」であるために、さらに〈小〉であることを表すために「こまかなり」を用いたものと思われる。

なお、「こまかなり」と「ちいさし」を重ねた例が 2 例見える。極〈小〉を表す疊語表現と思われる。

例 59 あまさぎ (魚類 出雲 14)

(原)魚の形はへに似て、ちいさく細かなる鱗あり。うろことにも用ひ申候。

例 60 すうつぎ (木類 飯石 5)

(原)卯の花と申て、細か成ちいさき花附申候。実はあさの実の様成物、かしら四つわり二成。

#### 4-4 〈小〉を表す語のまとめ

本資料の〈小〉を表す語には「ちいさし・ほそし・こまかなり」の 3 語があり、用例数では「こまかなり」が断然多いものの、他 2 語も相当の用例数をもつから、〈大〉の場合とは異なってどれか 1 語を基本的な語とすることはできない。

また、3 語の意味区別を示すことも容易でない。鳥類の大きさを表す類型的表現で「ふとし」に対応する「こまかなり」の例がなく、他にも「ふとし」と対義関係をなす「こまかなり」の用例が得られないのは、「こまかなり」のある種の特徴を示唆するものである。例 57 「茶の葉より細かなり」について述べたように、「こまかなり」の意味の重点は、程度の高い〈小〉を表す所にある。すなわち、「ちいさし・ほそし」と重なる部分はあるものの、主として〈小〉の下位の意味領域を担う語が「こまかなり」である。従って、本資料の〈小〉を表す語は、「ちいさし=ほそし」と「こまかなり」に分けるのが適切だと思われる。

「ちいさし」と「ほそし」の関係は、〈大〉の「おおきなり」と「ふとし」の関係と並行的のようにも見えるが、本資料の用例から2語の意味区別を明確に指摘することはできない。

## 5 まとめと考察

「出雲国郡別絵図註書帳」における大きさ語彙について、次のようにまとめる。

- ① 〈大〉を表す語は「ふとし」で、「おおきなり」も少数用いられている。
- ② 〈小〉を表す語には、「ちいさし」と「ほそし」が使用されている。
- ③ 〈小〉を表す「こまかなり」は、「ちいさし・ほそし」の下位の意味領域を担っている。

この結果を、『日本言語地図』(以下、LAJとする)に現れている現代出雲方言と比較すると、当該方言において生じた語彙交替の一端が明らかになる。

大きさ語彙に関係するLAJ第17～25図を見ると、近畿以東で意味区別が細かいのに対して、中国・四国以西では概して粗いという大まかな傾向が読み取れる。出雲地方も例外ではなく、分布する主な語類をまとめると次のようになる。ゴチック体はLAJにおける見出し語である。

おおきい	オオキナ類, オオキイ類	ちいさい	ホソイ類, コマイ類, チイサイ類
ふとい	オオキナ類, オオキイ類, フトイ類	ほそい	ホソイ類, コマイ類
あらい	アライ類, オオキナ類	こまかい	コマイ類, ホソイ類

調査地点により相違はあるが、代表的な語で簡略化すると次のいずれかの体系となる。なお、出雲方言では所謂形容動詞の終止形は～ダではなく、～ナの形である。

甲 〈大〉オオキナ・オオキナ・アライ ↔ 〈小〉ホソイ・ホソイ・コマイ

乙 〈大〉オオキナ・オオキナ・オオキナ ↔ 〈小〉ホソイ・ホソイ・ホソイ

筆者の簡単な調査でも、「皿」の〈大〉〈小〉を指示する例文で、50代の男女が

オッケナ ホー トッテ ゴシエ。(大きい方を取って下さい。)

ホシエ ホー トッテ ゴシエ。(小さい方を取って下さい。)

と用いることを複数の地点で確認した。老人語として理解できる20代女性もいた。

上の甲乙いずれの体系とも、西日本に広く分布する〈大〉フトイ類を含まず、〈小〉ホソイ類の意味領域が〈小さい・細かい〉にまで及ぶのが特色である。このLAJに現れた体系を、先の産物帳の大きさ語彙の調査結果と比べると、①は相違し、②は共通すると認められる。

①については、産物帳の時代から現代までの間に、フトイ → オオキナの変化(語の交替)を想定することで説明できよう。LAJにおいて、フトイ類は隣接する広島県にも分布することから、この変化がさして古い時期に遡らないことは容易に推測できるが、産物帳により初めて、1730年代以降の変化である可能性を指摘できる。ただし、恐らく東

からオオキイ(オオキナ)類が進出してきたとき、出雲方言はいち早くそれを取り入れたものの、意味区別の体系は従来どおりであったから、結果的にオオキナ類が〈太い〉などの意味領域を侵す結果となったのではないか。

LAJと共通する②については、そのまま近世中期出雲方言の反映と見てよい。LAJでもホソイーホソイーコマイの体系をもつ地点があるから、周辺部からコマイ類が進出してきたとき、最初は〈細かい〉の意味でコマカナリに代わって用いられ、次第に勢力を拡大したものと考えられる。今日の若い世代では、ホソイ類に代わってコマイ類を用いる傾向が著しい。

LAJに現れた〈小〉の体系成立に関しては、早く佐藤亮<sup>注8</sup>氏に説がある。ある時期の出雲方言にコマイーコマイーコマイの体系を仮定し、東部からコマイーホソイーコマイの体系が進出してきたとき、ホソイが意味を拡大してホソイーホソイーコマイが生まれ、さらにホソイーホソイーホソイの体系が生まれたというのが一案である。東から進出してきた体系の影響で、まずホソイーホソイーホソイが生まれてコマイーコマイーコマイと混在し、両体系の混交によってホソイーホソイーコマイが生まれたとする別案も示されている。

LAJによれば、〈小〉を表すホソイ類は島根県東部(隠岐島を含む)と鳥取県・高知県・北部九州沿岸(宍岐対馬を含む)という互いに隔たった地域で、コマイ類に囲まれた形で分布している。これらのホソイ類を、コマイ類の勢力拡大の中における残存と見るのか、逆に、何らかの理由でそれぞれ独立に分布を獲得した新語と考えるのか、という問題がある。

本稿により、出雲方言におけるホソイ類の分布が1730年代にまで遡ることが確認できるとすれば、他の地域についても、この時期の文献の集中的な調査を実施することによって、同様の知見の得られる可能性がある。出雲方言に関する限り、ホソイ類はコマイ類に先立って使用されていたと筆者は考えるが、佐藤氏の解釈とは異なるこうした結論の是非を明らかにするためにも、土佐および北部九州における過去の文献調査が必要である。<sup>注10</sup>

仮に、ある時期にホソイが〈小〉を表す語として広く使用されていたとすると、それを中央語(京都語)と無関係な現象だとは考えないのが自然である。例えば角川古語大辞典は、「ほそし」の第2義を「物の形が小さいさま」とし、松永貞徳『紅梅千句』九の「小督がしのぶ宿やしれけん/細き舛つかふおとこと名の立て」を例に挙げ、「細き舛」に「規格ヨリ小サイニセ舛」と注記している。類例をさらに加えて、中央語文献における「ほそし」の意味についても、改めて検討を加える必要があろう。

注1 上野益三『明治前日本生物学史 新訂版』(臨川書店1980)200p以下。盛永俊太郎・安田健編『享保元文諸国産物帳集成』(科学書院1985~1995)全19巻。安田健『江戸諸国産物帳』

(晶文社 1987)。

- 注2 拙稿「方言語彙資料としての諸国産物帳」国語学 171 集, 1992, 参照。
- 注3 島根県立博物館で常時一部(各2冊)が展示され、閲覧室にカラー複写と筆者作成の翻字本が配架されている。
- 注4 この改訂案がほぼ清書案となったことは、出雲国産物絵図註書帳の清書本の一部と考えられる岩瀬文庫蔵『本草産物図譜』の註書と比較すれば明らかである。
- 注5 例えば、山口県文書館には萩藩の編纂資料が数多く残っているが、註書の基礎資料は見えない。拙稿「萩藩における産物帳の編纂過程」島根大学法文学部紀要文学科編 16-1, 1991, 参照。
- 注6 出雲国郡別絵図註書帳でも次の語が拾える。「あぎ(=顎・腮)に針有之」(あいかけ魚, 魚類, 楯縫 43)「はび(=歯茎)さきにくい」(=棘)有之」(かわくり, 魚類, 意字 34)「葉よりしる出, まけ(=カブレ)申候」(かべうるし, 木類, 楯縫 42)「嶋にさばり(=取り付キ)居申候」(ふべ, 貝類, 神門 58)
- 注7 本資料の転写本の可能性のある国会図書館蔵『出雲国産物名疏』(『集成』第VII巻所収)では、原則として「大」表記で統一している。
- 注8 徳川宗賢編『日本の方言地図』(中公新書 1979) 51 p. 筆者にはコマイーコマイーコマイの体系が最初に仮定される点に不安がある。出雲方言話者の中には、コマイは若い世代の用いる語で、ホシエより新しい語だと意識している人があるからである。
- 注9 日本国語大辞典の方言欄および日本方言大辞典によれば、分布地域はもう少し広くなるが、大勢として意味・用法の衰退は著しい事実である。
- 注10 迫野虔徳氏の教示によれば、雨森芳洲(1668~1755)の著作とも言われる朝鮮資料『交隣須知』に次の例がある。明治14年刊本によって示すと、巻4(大多)の見出し語「小」に「ホソイモノハ エツテ ダセ」(28ウ)という日本文があり、その「ホソイ」の箇所にくさいを意味する朝鮮語が記されている。「ホソイ家」(巻2-34オ)についても同じである。対馬方言の混入であろうか。

福島邦道・岡上登喜男編『明治十四年版交隣須知 本文及び総索引』(笠間書院 1990)によると、写本・版本などの間で「ほそい→ちいさい」の本文異同があり、書写した人物の方言的背景による改変と思われる。

本稿は国語学会 2001 年度春季大会(神戸松蔭女子学院大学)における発表に基く。会場内外で多くの方々から種々の御意見、御助言をいただいた。

「出雲国郡別絵図註書帳」の調査に関しては、島根県古代文化センター当局から原本調査の機会を与えられ、写真複写を許されるなど、格別の便宜を受けた。また、編集委員会の指摘を受けて記述を一部改め、表記等の不備を整えることができた。併せて謝意を表する。

——島根大学教授——

(2001年7月3日 受理)